

## 英雄叙事詩『ジャンガル』における「脛骨を握り、黄色い太陽に拝む」 モチーフについて

D・タヤ

### はじめに

多くの学者たちは殆どの英雄叙事詩をその内容に基づき、戦闘譚と婚姻譚という二つの大きなジャンルに分類している。これと同様、『ジャンガル』も戦闘譚と婚姻譚を軸にし、物語が展開され、意味と形態が形成されている。『ジャンガル』における婚姻儀礼のモチーフには、「脛骨を握り、黄色い太陽に拝む」（以下「脛骨・黄色い太陽」と略す）というモチーフがある。それはいかに小さなモチーフのようであっても、成婚の二人が夫婦となったことを社会にアピールすることで、最も重要な役割を果たしてきた。昔の縁談では、シャガイト婚姻を賭け事や口論によって白紙に戻すことが可能であったが、ひとたび「脛骨・黄色い太陽」の儀礼を通過させたあとは、この縁談を戻してはいけないという掟があった。勿論、英雄も如何なる精気、勇気を有しても、もとの縁談を破棄したり、あるいは、他者の既に、「脛骨・黄色い太陽」の儀礼を済ませた妻を奪うという行為は許されないのである。この意味において、『ジャンガル』の英雄たちは自分の婚約者が他の英雄と縁談をすすめているという噂を耳にするとすぐに、その「脛骨・黄色い太陽」の儀礼をする前に駆けつけ、賭け事や口比べなどを行ない、自分の婚約者を連れ戻すのである。ここで、筆者はこのモチーフの『ジャンガル』に現れる形態、根源、意味などについて考察を行い、諸方のご意見を仰ぎたい所存である。

### 1 「脛骨・黄色い太陽」のモチーフの現れる形態

英雄叙事詩『ジャンガル』には以下のような三つの形態で現れる。

#### 1-1 『ジャンガル』の英雄たちが自分の婚約者と「脛骨・黄色い太陽」を行い夫婦となるモチーフ

『アルダル・ノヤン・ボグド・ジャンガル』はアルスランのアルグ・オラン・ホンゴルにドグシン・ドンブ・ハーンのドウィボル・シャル・ナチンという娘を差し上げ、そして不遇に遭ってなくなり、前世の因縁で出会ったアラーチ・ハーンのアルタン・テンジフヤ娘をホンゴルが自分の嫁に迎える巻』におけるドウィボル・シャラ・ナチンとアルグ・オラン・ホンゴルの婚姻儀礼は、このような内容であった〔『ジャンガルの文献資料（Ⅲ）』1985:65〕。

1-2 『ジャンガル』の英雄たちが自分の婚約者が他の男と結婚するという事情を聞くや否や、急いで「脛骨・黄色い太陽」の儀礼を済ませる前に到着し、相手の手、或いは脛骨の真ん中あたりに自分の手を重ね握るモチーフ

『ホシゴン・オランの婚姻巻』において、バヤン・チャガンという英雄が、ホシゴン・オラン英雄の婚約者であるグーシ・ザンダンという女性と「脛骨・黄色い太陽」の儀礼を行なう予定があることを聞くや否や、すぐに英雄バヤン・チャガンの陣に到着し、ホシゴン・オランは「グーシ・ザンダン娘と英雄バヤン・チャガン二人の間に入り、二人が握っていた脛骨のど真ん中を重ねて握り」座っていた〔T・バダマ, ボヤンヘシグ：1990：294-295、638〕。

『アルダル・ノヤン・ボグド・ジャンガルはアルサランのアルグ・オラン・ホンゴルにドグシン・ドンボ・ハーンのドウィボル・シャラ・ナチンという娘を婚約させ、不遇に遭してなくなり、前世の因縁で出会ったアラーチ・ハーンのアルタン・テンジフヤ娘をホンゴルは自分の嫁に迎える巻』では、ホンゴルは婚約者であるアルタン・テンジフヤという女性を力づくで奪うため、「脛骨を握っていた、天のトゥムル・ブセの手の上に重ねて握って」座っていた〔『ジャンガルの文献資料(Ⅲ)』1985:213〕。

1-3 『ジャンガル』の英雄たちが『脛骨・黄色い太陽』の儀礼に遅刻するモチーフ

『ホンゴルの嫁娶りの巻』に、ホンゴルは女神ザンダン・ゲレルと結婚するため、参じる時、すでに、「脛骨を握り、黄色い太陽に拝み、天のトゥムル・ブセに娘が嫁入りの支度しているの見える」〔13巻『ジャンガル』1964：27〕。ホンゴルはあつけにとられ、傲慢な態度で業を煮やし、持っていた重い剣で、トゥムル・ブセとザンダン・ゲレルの二人を切り殺してしまう。

## 2 「脛骨・黄色い太陽」のモチーフの淵源

『脛骨・黄色い太陽』のモチーフは、モンゴルの古代の伝統的婚姻儀礼に源流を持つものであると考えられる。「脛骨・黄色い太陽」の儀礼とは嫁入りの時、新設のゲルの前に白いフェルトを敷き、その右端に粟粒で太陽を、左端に月をそれぞれ描き、婿を太陽の上に、嫁を月の上にそれぞれ座らせる。そして脛骨の太い方の側を婿に、細い方（くるぶしががついている方）の側を嫁に握らせ、両者を太陽に向かせ：

「脛骨を握ろう/黄色い太陽に拝もう」と唱えながら三回拝む儀式を済ませた後、婿と嫁が脛骨をひねってくるぶしを離すのである。二人は脛骨とくるぶしを交換した後、競いあうかのようにゲルに入り、婿はくるぶしを西側の枕の下あたりに置き、嫁は脛骨を足下の側にそれぞれ置き、一生それを大

切に保管する儀礼のことである。先にそれを置いた方が将来この家で高い地位を得ることができると言われている。

20世紀末まで、ハルハ〔G・サンビルデンデブ：1989：298-299〕、新疆〔『ハン・テンゲル』1985(No. 1)：153-154〕、アルシャンスンレブ、スチンビリグ：1989：220〕、デード・モンゴル〔サランゲレル：1990：304-306〕などの多くの地域でこうした昔の儀礼が行なわれていたようだ。漢文化の影響を強く受けた遼寧省の撫順市のモンゴル人の間にも、このような儀礼が守られている〔ジョンジルト、イエシサンボー：1993：78〕。しかし、仏教がモンゴルにかなりの広がりを持ち始めたころから、古代のシャーマン信仰が歴史の舞台から身を引き、それにつれて、モンゴルの各地域での太陽、月、生殖器とつながりを持つ「脛骨・黄色い太陽」の儀礼も見えなくなり、ある地域では以下のようないくつかの儀礼に変遷しつつある。

2-1 花婿と花嫁がくるぶしのついた脛骨をひねり裂いて離し、それを奪いあいながらゲルに入る儀礼が、花嫁花婿とシャガイの四人の巫女との奪いあう儀礼になった。早期の文献資料の中、漢族の旅行者である蕭大亨の『モンゴル習慣誌』には、「婿と嫁は羊の骨を奪いあう儀礼が終わった後、天や地に拝む。」〔G.アスラト、フフウンデル訳：1985：264〕、「肉づきのよい脛骨を机の中央に置き、巫女たちが花婿とこれを奪いあうのである。」〔ロボサンチョイダン：1981（1918）〕と記録されている。近年のホルチン地方にも「花婿が羊の丸煮の中のくるぶしをシャガイの四人の巫女たちに先んじて急いで取る」というように、脛骨を奪いあうシーンが見られる〔フレルバートル、オランチュムゲ 1981:167〕。

2-2 花婿と花嫁がくるぶしのついた脛骨をひねって離す儀礼が、今は単なる花婿の力を試すためのしきたりへと変わった。ボルジギン・ハルハ氏族やスニド旗では、花婿が「脛骨を握り、茸毛の馬を繋ぎ、嫁を迎える」と言って、脛骨についているくるぶしを親指でひねって離し、長靴の胴の中に入れておくという習慣がある〔D・チャガン 1993:154〕〔G・サンビルデンデブ 1989：298-299〕。アラシャンのある地方では脛骨についているくるぶしをひねり取るのではなく、脛骨を「膝の裏側に置き、両の端からぐいと上に引いて折ってしまう」〔スンレブ、スチンビリグ 1989：220〕という、ものものしいしきたりになった。

2-3 オラドの婚姻儀礼には「瑪瑙などをつけた白い布袋の真ん中あたりを締めておいた後、花婿の右手と花嫁の左手を、それぞれこの用意された布袋の両側に入れさせてから」祈りを始める〔U・ナランバト：1982：45〕。またアムール川のドウルベド地方、北ゴルロス地方と吉林省の南ゴルロスなどのある地域では、「花婿と花嫁は羊の橈骨（とうこつ）の両端のところから持って天と太陽に拝

む」〔サンピノルボ：1990：307〕。これらは、「脛骨・黄色い太陽」の儀礼が変容し、脛骨を瑪瑙などをつけた白い布袋や橈骨に置き換えたものと考えられる。これら変容した儀礼から、昔のモンゴルでは「脛骨・黄色い太陽」の儀礼が取り行なわれていたことが伺えると言える。またモンゴルの考古学研究者が、発掘調査を通じて多くの女性の古墳から脛骨、男性の古墳から羊のくるぶしが副葬品として、被葬者とともに埋葬されていたことを発見している。これらの発見は古代、婚姻儀礼に広く使われる脛骨を嫁が、くるぶしを婿がそれぞれ所持し、それを自分の足下及び枕の右当たりに置いて、保管したのは勿論のこと、死後もそれぞれを副葬品として埋葬していたことも明らかにした。〔D・ダーワン：1992：142〕。

### 3 「脛骨・黄色い太陽」のモチーフの意味

世界の各民族の習慣や儀礼には、その民族特有の目的、必要性、そして意義が含まれている。目的、必要性、意義を持たず、かつ単調な行為のみで構成される儀礼は、ほぼ皆無であろう。現に知られているにせよ、忘れられているにせよ、かつてはみな何らかの目的、必要性、意義をもって、儀礼の習慣が形成されたと考えるのが当然だろう。モンゴルの婚姻儀礼研究における一つの糸口である、「脛骨・黄色い太陽」の儀礼もまた言うまでもなく、なんの目的もなく、脛骨を握り、黄色い太陽に拝むのではなく、その裏には個性豊かな「はっきりした意味」と「隠れている意味」という二つの意味的構造をなしている。現代の西洋人たちの間で婚姻儀礼が行われる時、握手（キス）を交わし、お互いに一緒になったこと、あるいは夫婦になったことを祝福する行為と同じように〔韋斯特馬克：1998〕、一方で、「脛骨・黄色い太陽」の儀礼も、脛骨のように頑丈で永遠に別れない夫婦になることを、天（太陽）と両親に誓いあうという意味があり、他方では、彼等の社会の倫理に基づいて築いた夫婦の関係を、儀礼という法的手段で証明しているものと考えられる。このことも、ドイツの法律で頻繁に使用されている「誓いあうことの象徴である握手を行なう」、「握手を交わし契りあう」、「握手で契る」といった言葉と酷似しており〔韋斯特馬克：1998〕、またはモンゴルで常に言われている「白い骨の繋がり／赤い血の運命」（『世界の文学』1994：No.5）の縁戚関係という言い回しの根源でもある。

「隠れている意味」の例として、中東のユダヤ人の新郎新婦二人は宗教的な儀礼を済ませた後、新鮮な魚で飾りたてた皿の上を三回またぎ歩く、あるいはそれぞれ一尾の魚の上を往復し七回またぎ歩き、子供に恵まれることを祈る〔韋斯特馬克：1998〕。「脛骨・黄色い太陽」の儀礼もこのユダヤ人の儀礼と同様、子供に恵まれ成長の無事を祝うという意味が含蓄されているものと解釈できる。「脛骨・黄色い太陽」の儀礼はモンゴルの古代の太陽信仰や脛骨信仰の合体であり、即ち男根信仰の現れである。モンゴル人の民俗学者であるL. ホルツアバートル氏は、モンゴルの祖とされるアロン・ゴ

ワ妃が未亡人である時に生まれた、ボダンチルたちの根源を、天神や太陽、月の光で関連づけて解釈し、そしてチンギス・ハーンも度々太陽に向かい、ボルハン・ハルダン山の神々に拜んでいたという行為などから、「太陽と月はモンゴル人の宗族の起源、言い換えれば、ボルジギン氏族の男根の守護神のシンボルである」〔L. ホルツアバートル、C. ウジマ：1991〕と論じた。太陽はモンゴルでは太古の時から、子孫の繁栄を象徴する男根の守護神である。太陽はまた更に天神の男根を象徴し、世界の万物の繁殖、繁栄をつかさどる神でもある。古代のモンゴルでは子供ができることを男根の機能とみなし、妻はそれを育てる母体であるとみなしてきた。『ジャンガル』の英雄たちはいつも「父より霊体を得て、母より身体が産まれるものである」〔J. ジョナイ：1999〕。その意味において脛骨は、ユダヤ人の婚姻儀礼における魚のように、外形では男根を象徴し、人間の繁殖をつかさどる男根の守護神のシンボルである〔D・タヤ：1995〕。モンゴルの婚姻儀礼における花婿が脛骨の太い端を持ち、花嫁が脛骨のくるぶしのついている端を持ち、太陽に拜む行為の後、くるぶしをひねって離し、婿にあげることは、嫁はくるぶしの霊力で夫にくるぶしのような素敵な子供を生んであげるという意志があるものと推測される。「脛骨・黄色い太陽の祝詞」の中の：「吉たる月日を待ち／束ねた髪を梳かし／吉たる希望樹のように／繁栄できるように／脛骨を握らせ／黄色い太陽に拜ませよ」〔L. ホルツアバートル、C.ウジマ：1991〕という決まり文句には、花嫁が脛骨と黄色い太陽の霊力でアラン・ゴワ妃のように「天の子」を生むこと、あるいは、たくさんの子孫に恵まれることを祈願する意味があることが明らかである。そしてまた、白いフェルトを敷き、右側に粟粒で太陽を描き、左側に月を描くことも、世界の多くの民族誌において、花嫁が花婿に向かって穀類の種や干した果物を撒き、今後の繁盛、繁栄を祝う〔韋斯特馬克：1998〕行為と同様に、繁盛、繁栄を示しているのも明らかである。

#### 4 脛骨の信仰

上述した脛骨と男根信仰関係を更に解説すれば以下のようになる。

4-1 モンゴル人は大昔から火のことを「母なる火」、あるいは「火の天」（女神の天神）と信仰し、母性および母のシンボル〔L.ホルツアバートル、C.ウジマ：1991〕として見なしてきた。更に火の祀りにおいて、「栄養・霊力に満ちた羊の胸骨（ウブチウー）／新しい白い糸で美しく巻いた／脛骨と四つの長い肋骨で／信仰深き火の神様を祀る」〔L.ホルツアバートル、C.ウジマ：1991〕。

という儀礼があり、火の神様を胸骨（ウブチグー）と脛骨で祀る。モンゴルでは、嫁いだ女性が実家に里帰りする時、もしくは親戚の女性が訪問に訪れる時、胸骨をもって歓迎する習慣がある。それで、

火の天神を羊の胸骨を以って祀ることと、嫁に羊の胸骨を食べさせることは意味的な関連が同じであり、胸骨は心臓や肝臓を保護し、知恵のふくろである〔マンサン：1990〕。これ以外に、古代の人々は女性の胸——乳房を女性の生殖器信仰の対象にしていた〔Y. バヤル：1990〕。このことと同様、胸骨はさながら女性の代替になっていたかもしれない。チャストのモンゴル人の間における婚姻儀礼において、花嫁の前に羊の胸骨、花婿の前に脛骨をそれぞれおき、斜陽に向かわせて拝み、式を司る者が羊の胸骨を入れた容器を花嫁側に持たせ、脛骨をいれた容器を花婿側に持たせる慣習も〔アラシャ：1986〕、胸骨は女性、脛骨は男性を代替していることを間接的に示している。それで、火の祀りにおける脛骨は男根を象徴し、火の神が脛骨の霊力で、祀りを取り行った家庭に子供をたくさん授けてくれることを祈願する意味があるかもしれない。

4-2 チンギス・ハーンの八白宮における“当歳オス子羊の祀り”の儀礼において、「チンギス・ハーンの霊の前に三つの容器を用意し、オスの子羊の睾丸と脛骨を以って、祀りを行う」という行為がある。このことに関して、N. ホルチャは：「古代のモンゴルで9月の始めに、種オス羊を羊群れに合流させる時、一匹の当歳オスの子羊を屠殺しその睾丸を容器に入れ、メス羊が子を産めなくなることを防止し、家畜の繁殖を願った、信仰的行為」であり、「これも当然、古代、男性の生殖器を信仰していた慣習の牧畜業における出現であると解釈するのが当然である」と述べた〔内蒙古大学図書館：1986〕。筆者の管見では、子羊の睾丸や脛骨が単に家畜の繁殖を象徴化しているのではなく、人間と家畜の生殖器を代替し、その繁栄を願っているのである。すなわち、家畜の生殖器の象徴——子羊の睾丸で、家畜の繁殖を、人間の生殖器の象徴——脛骨で、人間の繁栄をそれぞれ祈願しているのである。

4-3 古代モンゴルの人々は、貝殻を装飾に用い、神がいるとされる場所に置いて祀った。そして時に、貝殻と脛骨を一緒に並べ、祀っていた。祭祀の場所に貝殻をおく儀礼は、現在、四川省のモンゴル人の中に残っている〔Y. バヤル：1990〕。さらに、モンゴルのシャーマンの巫女の衣装にも、小さな貝殻を刺繍の上の装飾に用いている。後にモンゴルの或る地域では、貝殻と脛骨を並べておく習慣が、羊の尻尾と脛骨を並べておく習慣へと変遷をとげているようだ。スニド旗では、神を祭る時、西の方に脛骨、東の方に尻尾をそれぞれおく〔D. チャガン：1993〕。ウジムチン旗では、一つの大きな容器に肉つきのよい脛骨を入れ、その上に三本の大きな尻尾を竹串で通して祀る〔ナムジドルジ、N. ブフハダ：1991〕。貝殻を信仰する慣習を「当然、古代の生殖器崇拜の立場から、その対象の形である貝殻を信仰することを示している。貝殻——母性の生殖器の象徴——生命の扉である以上、人間の信仰の対象となり、自然の一つの物質から信仰の対象となる変化である」〔Y. バヤル：1990〕。そのため、貝殻、脛骨を並べておき、信仰することは、胸骨と脛骨を並べて信仰することと同様、男女の一体——人間世界の完結と繁殖——を象徴すると考えられる。

4-4 モンゴルではオボーを祀る時、オボーの真ん中に樹を立て、その周りに小石や土砂などで高い台を作り上げる。また、シャーマンの帽子の上には小さな鷲の形の作りものがあることである。またシャーマンが手にするシャーマンの樹の上には、錦糸などで編み上げた鳥の巣があり、巣の中に綿や毛で作った<卵>があることなどについて、スユは「オボーの真ん中にある樹は<母>の象徴、周りに積み上げた石は<父>の象徴である。オボーは<樹木と石の結実>である。シャーマンの帽子の上やシャーマンの樹の上にある鳥は<父>の象徴、<卵>は繁殖の象徴である。これは<樹木と鳥の結実である>。これらの結実は父母や陰陽のハーモニーを象徴化し、繁殖の信仰を示している」と解釈した〔スユ：1995〕。モンゴルで、父母、陰陽の調和を象徴し、繁盛の信仰の一つは、ナイナイ聖人の信仰である。モンゴルでは子供を疾病から守ってくれるナイナイ聖人を、降臨された樹木に見送る時、「柳の髓があり／九色の布飾りがあり年を取ったナイナイ聖人を／老いも若きも皆で見送ろう」〔G. ボヤンバト：1990〕と大声で祈る慣習がある。この場合における「柳」は「母」の象徴であり、「髓」は「父」の象徴であり、「柳の髓」はスユ氏の指摘したように、「樹木と髓の結実」である。モンゴル人は昔から柳を大切にし、神聖化してまつるのは勿論のこと、オボーの真ん中に柳の樹をおき、祀るのである。

この儀式に関して学者達は、モンゴル人の柳や柳の葉を信仰することは、古代のモンゴル氏族たちの、柳の葉を女性の生殖器の象徴だと見なしていたことと深く関わりがあると指摘している。満州族も柳を信仰し、満州族の生殖器信仰と起源がある仏陀媽媽という神も柳の葉に宿り、人間を柳の葉のように繁栄することを象徴していた。満州族も柳の葉の形をこの神の女性を特徴づけていると見なしている〔富育光、孟慧英：1991〕。「柳の葉の髓のある」という言い方からすると、ナイナイ聖人が子供を授けてくれる神として、陰陽の調和を象徴し、繁殖をコントロールする神であることが明らかである。

4-5 モンゴルの、女性が17歳になると「血の力」が整ったとして嫁がせ、男の子が18歳になると「血の髓」が整ったとして、結婚させる慣習〔オトゴン等：1990〕は、男女が生殖的に成熟し、婚姻できる適齢に達したことを意味している。「血の力」「血の髓」とは、「血の力」、すなわち女性の生理が安定し、心身ともに結婚できる年齢に達したことを指し、「血の髓」は男の生殖器が成熟したことを意味するのではないかと考えられる。

4-6 モンゴルでは、子供が誕生した時、「母親に薄い乳茶を飲ませ、肉づきのよい脛骨を三回水で洗ってから、肉汁つきの料理を作って食べさせる」〔オトゴン等：1990〕。「赤ん坊の初洗い」儀式では、羊の右の脛骨と四つの長い肋骨をゆで、脛骨を子供の分として残し、後に子供の母親がそれを

食べ、くるぶしがついたままの脛骨を上座の木箱に保管する〔オトゴン等：1990〕。

オイラドのモンゴル人は、羊の脛骨のくるぶしを離して白いフェルトの上におき、子供を脛骨の肉汁で洗う習慣がある〔N. バーサン：1999〕。更にまた、子供が病気にかかった時、脛骨を以って治療に当たることや、既婚した女性が子供を生めない場合、脛骨で巫術を施すのである〔タヤ：1994〕。これらの習慣は子供が生まれたのは脛骨の霊力のおかげであるとする信仰を意味している。

4・7 以上のことから、モンゴルにおける婚姻儀礼で「脛骨を握り、黄色い太陽に拝む」という行為は、脛骨の信仰が男根信仰と関わりを持つことが、間接的に立証された。花嫁の父親が必ず婿に脛骨を握らせることは、祖先の子孫の恵みを後代に伝達するかのようである。花婿が脛骨の太い方を、花嫁が脛骨の細い方をそれぞれ握ることは、男根の象徴を意味しているかのようだ。花婿がくるぶしを、花嫁が脛骨をそれぞれ分けて取り、一生保管することと、死後も副葬品とする〔D. ナーワン：1992〕ことは、嫁が生殖器の象徴——脛骨の霊力で、多くの子供に恵まれ、来世も子孫が繁栄することを象徴したのである。モンゴルの古代信仰における脛骨は、かつての男根信仰における自然な形態であり、「脛骨・黄色い太陽」における信仰はすなわち、かつての男根信仰のあいまいな残存である。

#### おわりに

ここで観察した、「脛骨・黄色い太陽」の儀礼における「隠れている意味」は、その儀礼元来の持つ形式あるいは意義のことであり、「明確な意味」は後に付加された意味であることが指摘できる。このように、「脛骨・黄色い太陽」の儀礼は、天神の男根のシンボル——太陽、人間の男根のシンボル——である脛骨の霊力で、新婚者が子供に恵まれることを祈願するものである。

#### 参考文献：

- 『ジャンガルの文献資料（Ⅲ）』1985（トドモンゴル文字）新疆人民出版社。  
T.バダマ、ボヤンヘシグ1980『ジャンガル』（トドモンゴル文字）新疆人民出版社。  
13巻『ジャンガル』1964（トドモンゴル文字）新疆人民出版社。  
G.サンビルデンデブ1989『牧民の習慣儀礼の伝統』内蒙古科学出版社。  
『ハン・テンゲル』1985 No.1 新疆人民出版社。  
スンレブ、セチンビリグ1989『アラシャンの民俗誌』内蒙古人民出版社。  
サランゲレル1990『デードモンゴルの民俗誌』内蒙古人民出版社。  
ジョンジルト、イェシサンボー 1993『モンゴルジンの婚姻の嚆』内蒙古文化出版社。

〔明朝〕蕭大亨 『モンゴル習慣記』（G.アサラト、フフンデル訳1985『聖武親征録』 内蒙古文化出版社）。

ロボサンチョダグ 1981 (1918) 『モンゴル民俗誌』 内蒙古人民出版社。

フレルバートル、オランチムゲ 1981 『ホルチンの民俗誌』 内蒙古人民出版社。

D.チャガン 1993 『スニドの民俗誌』 内蒙古人民出版社。

U.ナランバト 1982 『オラドの婚姻儀礼』 北京民族出版社。

サンビルノルボ 1990 『モンゴル民俗誌概略』 遼寧省民族出版社。

D.ナーワン 1992 『古代モンゴルの歴史文献資料』 内蒙古人民出版社。

韋斯特馬克 1998 『人類婚姻史』 上海文芸出版社。

『世界文学』1994 No.5 呼和浩特。

L.ホルツアバートル、C.ウジマ 1991 『モンゴルのシャーマンの祭祀儀礼の文化』 内蒙古文化出版社。

D.タヤ 1995 「脛骨の信仰について」（『オイラド研究』 No.2 新疆人民出版社。

J. ジョナイ 1999 『ドグシン・シャラ・フルフーの巻』（写本）。

マンサン 1990 『モンゴルシャーマン』 内蒙古人民出版社。

Y. バヤル 1990 「モンゴルの古代文化と馬の焼印の図」 『内蒙古師範大学』 No.1

アルシャ 1986年5月15日付 「チャソトのモンゴルの婚姻儀礼におけるお皿を投げ、羊の脛骨を折る遊芸」 『内蒙古新聞』。

『内蒙古大学の図書館整理』 1986 No. 3。

ナムジルドルジ、N. ブフハド 1991 『モンゴル民族誌研究』 内蒙古人民出版社。

スユ 1995 「アンタイの文化意識の起源——文化人類学的分析」 『内蒙古師範大学』 No.1。

G. ボヤンバト 1990 『モンゴルの樹木信仰』 内蒙古文化出版社。

富育光、孟慧英 1991 『満族薩滿教研究』 北京大学出版社。

オトガン 等編 1990 『モンゴル国の民俗学』（I）内蒙古人民出版社。

N. バーサン 1999 『オイラドの民族誌』 内蒙古人民出版社。

新疆ホブグサイル県フィールドワーク調査 1994年2月。

(D・たや 内モンゴル大学モンゴル学学院)

## The Rites as a Motif in Jangar of Prostrating Oneself Before the Rising Sun with a Sheep Tibia in His Hand

D.Taya

The article analyzes the Motif in Jangar of prostrating oneself before the rising sun with a sheep tibia in his hand from points of its modality, origin, symbolization and Mongols' belief regarding sheep tibia, and then tries to explain the immediate as well as cryptical meaning of the Motif.